

## ある未完訳のフルベッキ書簡

—1866年・長崎における村田・綾部への授洗記録

中 島 一 仁

本稿で紹介する資料は、1877年に米国で刊行された *A Manual of the Missions of the Reformed (Dutch) Church in America* 掲載の “The First Baptism of Converts in Japan” と題された一章<sup>(1)</sup>の日本語訳である。ここには、日本の幕末期における3番目のプロテスタント受洗者である佐賀藩親類・村田政矩（若狭）と同藩士・綾部幸熙（三左衛門）兄弟の洗礼<sup>(2)</sup>が詳しく記録されている。

後述するように、この一章は村田・綾部に授洗したG・F・フルベッキの書簡を載せたものと思われる。受洗の様子やフルベッキと交わした会話などがきわめて詳しく書かれた貴重な記録であり、幕末期の日本へのプロテスタント伝来を考える上で欠くべからざる史料だと考える。

フルベッキの書簡を集めたものとしては、高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』<sup>(3)</sup>が有名であるが、この中にこの一章と同内容のものは収められていない。同書で村田・綾部の受洗を記したものとしては、「一八六六年六月二〇日の事件の詳述」<sup>(4)</sup>（以下、「詳述」と略す）と題された、フルベッキの米国伝道局への報告書簡が載っているだけである。『フルベッキ書簡集』は米国ニュージャージー州のラトガース大学に隣接しているニューブランズウィック神学校の図書館に保存されていたフルベッキの書簡を、高谷氏が1964年にマイクロフィルムに写し、英文タイプに起こしたものの日本語訳である。多数の書簡を載せているが、タイプ原稿

すべてが収録されているわけではない。未収録分も含めたタイプ原稿全体は明治学院に保管されており<sup>(5)</sup>、村田・綾部の受洗の状況を報告した書簡は「詳述」と後述のもう1通の計2通があるが、“The First Baptism of Converts in Japan”は含まれていない。

このほかフルベッキの書簡は、ウィリアム・E・グリフィスが1900年に出版した *Verbeck of Japan; A Citizen of No Country; A Life Story of Foundation Work Inaugurated by Guido Fridolin Verbeck*<sup>(6)</sup> (日本語全訳版『日本のフルベッキ：新訳考証：無国籍の宣教師フルベッキの生涯』<sup>(7)</sup>がある)にも多数引用されている。ただ、書簡集ではないため、一通一通が順番に収録されているわけではない。

実は、“The First Baptism of Converts in Japan”は、部分的にはいくつかの書籍で引用されており、和訳されているものもある。古いものから見ていくと次の通りである。

#### ① *Verbeck of Japan*

1900年の出版時期からして“The First Baptism of Converts in Japan”を孫引き・要約したのではないかと思われる地の文 (pp.126-127)<sup>(8)</sup>が収められている。分量は原文237行(行数は小見出しを除いた部分)の13%分ほどにすぎない。

#### ② *A History of Christianity in Japan*<sup>(9)</sup>

のちに同志社神学校教授などを務めたオーティス・ケリーが1909年に出版した。引用の量は53%。2010年には江尻弘氏が日本語訳版<sup>(10)</sup>を出版されている。

#### ③ *Pioneers to Partners :The Reformed Church in American and Christian Mission with the Japanese*<sup>(11)</sup>

ゴードン・D・レーマン氏が原文の11%分を引用している。

管見の限り引用している書籍や論文はこのように少なく、特に日本ではその存在が十分に認識されることはなかった<sup>(12)</sup>。加えて、いまだに

邦訳されていない部分も多くあることから、ここに日本語訳を試みるものである。

*A Manual of the Missions of the Reformed (Dutch) Church in America* は、米国（オランダ）改革派教会出版局が海外布教用に刊行したマニュアルである。日本国内には所蔵している図書館などはないようで、米国の大学図書館などの蔵書をデジタル化した Internet Archive のサイト<sup>(13)</sup> で読むことができる。

“The First Baptism of Converts in Japan” の冒頭は、編集者が記した14行のイントロダクションから始まっている。そこには、村田・綾部の受洗の事実は、かれらの生命・財産に関わることであったために公にされることなく、そのことを記した手紙も数人にしか読まれることなくニューヨークの改革派教会伝道局に眠っていたことが記されている。この導入部の末尾は“Dr. Verbeck's narrative begins.”で締めくくられており、これに続いて一人称の“I”で語られる長い本体部分が続き、適宜、小見出しがついている。

ケリーも引用部分の出典を示すためにつけた注で“Dr. Verbeck's letter”としており、この一章の導入部を除いた本体部分は、出版の前にフルベッキから伝道局に届いていた書簡を掲載したものとみて間違いないと思われる。小見出しをフルベッキ自身がつけたかどうかの手掛かりはない。

フルベッキが村田・綾部への授洗を本国へどのように報告したのかは、以下のように推測できよう。

1866年10月19日付フルベッキ書簡<sup>(14)</sup>に「先月の初め、あなたに宛てて、今は合衆国にいる私の友、C.M. ウィリアムズ師への手紙を出しました。……その中にこの五月二十日に私が執行した二つの授洗についての簡単な報告をしました」とある。また、1867年3月1日付書簡<sup>(15)</sup>

に「一八六六年一〇月一九日付の手紙で若狭と綾部の受洗に関し詳細をお伝えしましたが、なお詳細を記入した用紙一枚、同封いたします。次の便でさらに続けて申し上げたいと存じます」とある。

以上からフルベッキの報告書簡は、

- ① 1866年9月初めにウィリアムズ経由で知らせた「簡単な報告」
- ② 1866年10月19日付手紙
- ③ 1867年3月1日付手紙に同封された「詳細を記入した用紙一枚」
- ④ ③の次の便で出された手紙（これは出すつもり、とされているものだが）

など数種類あったと考えられる。

このうち高谷タイプ原稿のなかに確認できるのは②のみである。③の3月1日付手紙自体はタイプ原稿に含まれているが、「詳細を記した用紙一枚」は確認できない。①と④もタイプ原稿のなかにそれらしいものは見当たらない。「詳述」がこのうちのどれに該当するのかの特定もできない。

これらのことから、ニューブランズウィック神学校図書館に残るフルベッキ書簡以外に、授洗について記した手紙が存在した可能性（場合によっては複数）が想定しうる。“The First Baptism of Converts in Japan”もそのような手紙の一つであり、出版局に書簡の現物が持ち込まれてそのままになり、フルベッキ書簡群に戻されることなく行方が分からなくなってしまったものではなかろうか。

次に“The First Baptism of Converts in Japan”に書かれた内容を見てみたい。1860年ごろに始まった村田・綾部とフルベッキとの関わりから説き起こし、1866年の授洗前後の経緯や授洗時の様子が「詳述」より格段に詳しく書かれている。「詳述」はどちらかという、授洗についてのフルベッキの受け止め方や村田のような高い身分の者が受洗す

ることの重さという、出来事の評価が記述の主体となっており、授洗までの経緯や授洗そのことの記録としてはあまり詳しく記されていない。

記載内容で注目される点を挙げると次の通りである。

(a) 村田・綾部の受洗は、用意周到に計画されたというより、佐賀から長崎を訪れる機会を利用し、フルベッキに事前に知らせることなく行われたものであった。「彼と弟の来訪はある意味、偶然のことでした。彼は思いもかけずに、藩主のもとを離れてこの町の近くに住む親戚を訪ねることができたのでした」という記述があるからである。

このことに関しては、「亡鍋嶋孫六郎殿（原注：深堀・茂辰）十七年忌ニ付、村田若狭殿四月三日浜八丁立・八丁立深堀屋敷御着崎、尤五嶋町深堀屋敷止宿」と、佐賀藩作成の史料<sup>(16)</sup>にあることと符合する（慶応2年4月3日＝1866年5月17日）。村田・綾部の実父である鍋島茂辰の十七年忌の法事が長崎市深堀で行われるのを利用して普段暮らす佐賀を離れ、フルベッキのもとを訪れたのだ。ふたりがそろってフルベッキを訪問する機会は希少だったはずであり、この法事を好機と受洗の希望を伝え、20日の日曜日に宿願の受洗を実行に移したのであろう。

一方で20日はペンテコステに当たる日であった。フルベッキは「詳述」で、「聖書に定めていない慣習の祭日の如き儀式とか、その宗教行事（又は儀式）を無視した、わたしたち清教徒的な立場から洗礼とペンテコステの日がうまくあったことに本質的な重要性は認めません。しかし、このことを無視しているわけではなく、むしろそのことが興味をつけ加えたものと思います」と述べ、自身にとって日本で最初の授洗に起こった偶然を抑制的にはあるが素直に喜んでいるようである。

(b) フルベッキと村田が初対面した17日の2日前、5月15日に別の佐賀藩重臣がフルベッキと会っていることが分かる。この人物は、「背が高く、見るからに指揮官らしく、一方の足というか腰が不自由でした。彼は知性にあふれていました。どこか厳しい表情で、深く考えることに

慣れた人間のように」と描写されている。フルベッキとは、キリストの教えが現実世界にどのような効果を生むのかなどに関して長時間話している。この人物が誰なのかは、「日藩主の親類と同じくらい身分の高い人」とされていることが一つのヒントであり、この記述は佐賀藩内の家格の一つである「親類同格」を言い表しているのではなからうか。村田・綾部と同じく法事に出るために長崎を訪れたのだとすれば、彼らの実家と親戚関係にある藩内最上層の人物であろう。

(c) 村田・綾部は、「聖書に非常に精通しており、いくつか適切な引用もし、対話をしている間に私が何回か聖書の一節を口にすると、彼らは簡単にそれがどの一節かを理解し」ていた、というほど、聖書学習をしていた。5年ほどにわたる村田らのキリスト教学習が徹底したものであったことを窺わせる。フルベッキと村田らの間の意思疎通がどのようになされたのかははっきりしないが、フルベッキなどに英語を習っていた綾部と、洗礼に立ち会った村田の家臣・本野周蔵が通訳に当たったのであろう。

(d) 村田・綾部は、受洗を強く求めたが、一方で外部に漏れないよう秘密裏に行くことも強く求めている。「日本に情報が戻ってきて、彼らや家族の命を危険にさらすことがないよう、アメリカにも報告しないことを求めさせました」という記述からは、怯えているとさえ言えるような様子が窺える。

(e) フルベッキにとって、日本人への初めての授洗は予想外に早く訪れたものだった。彼は「若狭は私の不意を突いて、町から立ち去る前に彼と弟の綾部に洗礼を授けることを私が拒むかどうか聞いてきました。私は驚きました」と率直に記している。さらに「中央のテーブルに白い布を広げ、もっといいものが欲しかったのですが、大きなカットグラスの果物皿を洗礼盤代わりに用意しました」「洗礼式用に間に合わせで形式を変えた礼拝式を続けて行い」とにわか仕立ての洗礼式であったこと

を白状している。

注

- (1) The Rev. G. F. Verbeck, D. D., “The First Baptism of Converts in Japan,” *A Manual of the Missions of the Reformed (Dutch) Church in America* (New York: Board of Publication of the Reformed Church in America, 1877) pp. 301–309.
- (2) 中島一仁「幕末期プロテスタント受洗者の研究：佐賀藩士・綾部幸熙の事例に見る」『佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要』8 (2014年), 「同 (2)：元佐賀藩士・綾部幸熙の信仰と生活」同9 (2015年), 「同 (3)：史料に探る村田政矩」同10 (2016年) 参照。
- (3) 高谷道男編訳『フルベッキ書簡集』(新教出版社, 1978年)。
- (4) 同前 100–103 頁。なお、後述の高谷氏によるタイプ起こし原稿では“20 May 1866”とされているうえ、実際に村田・綾部の受洗は1866年5月20日のことであり、「六月二〇日」とあるのは出版の際の誤植である。
- (5) 仮に「高谷タイプ原稿」と呼ぶ。明治学院歴史資料館所蔵。
- (6) William Elliot Griffis, *Verbeck of Japan; A Citizen of No Country; A Life Story of Foundation Work Inaugurated by Guido Fridolin Verbeck* (Fleming H. Revell Co., 1900).
- (7) W. E. グリフィス著・松浦玲監修・村瀬寿代訳編『日本のフルベッキ』(洋学堂書店, 2003年)。447–452 頁に「高谷タイプ原稿」全書簡の通し番号、宛先、書き出し文言、発信地、日付、タイプ原稿におけるページ数をまとめた一覧表がある。
- (8) 同前 114–115 頁に当該部分がある。
- (9) Otis Cary, *A History of Christianity in Japan* (Fleming H. Revell Co., 1909) pp. 57–60.
- (10) O・ケーリ著・江尻弘訳『日本プロテスタント宣教史：最初の50年 (1859–1909)

年)』(教文館, 2010年) 86-90頁。

- (11) Gordon D. Laman, *Pioneers to Partners :The Reformed Church in American and Christian Mission with the Japanese* (William B. Eerdmans Publishing Company, 2012) p70. 中島耕二氏のご教示による。
- (12) 坂井信生「明治期長崎におけるキリスト教(覚え書)第2部プロテスタンティズム(1)」(『活水論文集 人間関係学科編』47, 2004年)は, *A Manual of the Missions of the Reformed (Dutch) Church in America*に言及し(30頁), 村田・綾部の受洗に至る経緯が記されていることを紹介しているが, 引用はしていない。
- (13) URL : <https://archive.org/> の Texts のコーナーから検索。
- (14) 前掲高谷タイプ原稿 117 頁 (『フルベッキ書簡集』『日本のフルベッキ』のいずれにも不掲載)。
- (15) 前掲『フルベッキ書簡集』108頁。
- (16) 「白帆注進外国船出入注進 三」『佐賀県近世史料』第5編第2巻(2015年) 341頁。

(本稿は2016年7月9日, 明治学院大学キリスト教研究所で行った公開研究会での発表内容に基づく)



資料

翻訳 中島一仁・赤川 学  
監修 中島耕二

## 日本における改宗者の初めての洗礼<sup>(1)</sup>

神学博士・フルベッキ牧師による

日本における最初の洗礼式の歴史は、以前は公表されることはなかった。その歴史に登場する二人の男が受洗したときは、彼らの行為が少しでも話に出たり公になったりすれば彼ら自身や家族、友人の命が危険にさらされ、彼らの財産は没収に処せられたであろう。もし、そのようなキリスト教信仰の公表が必要であったならば、彼らは喜んで死を甘受するつもりだったのであるとはいえ、彼らは彼らの血縁の者を同様の危険に巻き込む権利を持っていないと感じただろう。彼らの信仰と教会との結びつきを記した手紙は、ニューヨークの私たちの教会の伝道室にこの何年もの間、眠っていた。ごく数人にしか読まれることなく。

フルベッキ先生が語ったところによると……。

### ○種まき

私が出した数通の手紙や報告書で、聖書の研究に取り組む五人の仲間たちの話があったと思います。これらの男性たちは、横浜<sup>(2)</sup>から二日のところにある、日本でも最も開け、かつ勢いのある都市である江藩の城下町S<sup>(3)</sup>に住んでいました。彼らは長老派を中心とした中国の布教団体の印刷所から取り寄せた聖書や本、小冊子を私から入手してから長い時間が過ぎていました。一八六〇年には既に、私は三月にSにいくらか本を送り、一八六一年五月にも新約聖書を何冊か、さらに『キリスト教

証驗論』を送りました。一八六二年秋には、彼らの一人である綾部がここへ来て、私といつも勤勉に聖書を読んで質問するようになり、私は彼の真面目さと心の実直さに心を打たれました。六三年春の騒動<sup>(4)</sup>のさなか、夜に私のところに来て、遠くぼつんと住んでいた私と家族に危害が及びそうになっていることを警告してくれたのも、同じ彼でした。その年の五月十三日、その騒動が原因で、私たちは上海に向けて出港し、そこで夏の間過ごしたことは忘れられません。出発のごく数日前ではありましたが、上海の美華書館<sup>(5)</sup>から大量の本を受け取り喜びました。それらのうちの百冊以上はトラクトを中心としたものでした。私はそれをSにいる友人に送り届けました。六三年十月、上海からこちらに戻ったところ、私の忠実な生徒である綾部が昇進のために故郷に呼び戻され、もし可能だとしても、すぐには私のところに戻ってくることができそうにないことを知りました。この不思議な国では、偉くなればなるほど行動が制限されるようにみえます。天皇でさえ、宮廷から出ることなどあり得ないと思われています。私たちが恵みの座<sup>(6)</sup>で何度も懇願してあげなければならないような苦痛を味わっている彼らから、私がしばらく離れ離れにならねばならなかったのは、神意にさえ思えました。

### ○彼らの使者——代わりの者によって開かれた聖書学級

しかし、そう長くたたないうちに、彼らは本野<sup>(7)</sup>という使いを寄越しました。本野は若い役人で五人の仲間のうちの一人の家臣でした。彼自身、聡明な男で、まさに英国の学者のようでした。本野に与えられていた使命は、新約聖書のうち彼らが自力では十分に理解できず、最も難しいと思った箇所を私と一緒に読んだり、私が時々受け取る新しい本や小冊子を手に入れたりすることで、時には教義上の重要な点について質問することもありました。これは聖書の授業としては回り道ではありましたが、使者は自分への信頼に忠実でありました。結果は次のことを明

らかにしました。「主が勝利を得られるために、兵の数の多少は問題ではない」<sup>(8)</sup> ということと、彼は小さくてまったく不完全な手段でしか神の意志を実行できなかったのに、偉大な任務を成し遂げたことを。

ことはこのように二年以上続きました。私を訪れる使者は時には姿を消したり再び現れたりして、往復するたびよい知らせを運んできました。ただ、目に見えてよい結果をもたらしたわけではありませんでした。しかし、希望に満ちたりなかった私の思いは、厳しくとがめられることになりました。というのは、その年の五月十四日に使者が私の家に来て、日藩のさる重臣たちが既に街に入り、私に面談の日時を言うように求めていると話したからです。彼らは、私にとっては筆舌に尽くしがたい喜びと驚きでしたが、前述のように、五人の探求者仲間のうちの三人であることが判明しました。彼らはふた組に分かれて私を訪れることになり、私は初めの組には次の日の午後二時を指定し、次の組には二日後の同時刻を指定しました。

### ○高貴な人たちとの面談

その通りに五月十五日の午後、訪問者は三十人のお供を連れて姿を現しました。私の家の居間<sup>(9)</sup> は多くの付き添いの武士らでいっぱいになりました。さらに多数の刀を二本差した身分の低い家来も従えており、彼らは私の家の外から見ているしかありませんでした。これらの従者の中には私が見知っている者も何人かいました。その客人は、日藩主の親類と同じくらい身分の高い人であることが分かりました。彼は背が高く、見るからに指揮官らしく、一方の足というか腰が不自由でした。彼は知性にあふれていました。どこか厳しい表情で、深く考えることに慣れた人間のようなのですが、それでも彼は心から楽しげに語りました。通常の紹介の挨拶を終えると、「教義」に関する興味深い話が始まり、とてもおもしろいものでした。私は彼に「正義や節制や来るべき裁き」<sup>(10)</sup> につ

いて説明はできたかもしれませんが。しかし、信仰、希望、愛などより高次の話題については、彼と従者たちにより深く考えてもらうことはできませんでした。というのは、私を訪れた威厳に満ちた人物は、この世の悪の根源、悪が不思議にも続くことを許されていること、神の公正さ、様々な局面で神の正義が欠けているようにみえること、などなど、無益な問題についての理由づけを求めたのです。私は彼の議論に覚悟はできていました。なぜなら、異教の地では、古代の教会でたたかわされた論争の種に何度も対処せざるを得ないと分かっていたからです。私が最も精魂を傾けたのは、彼に悪の邪悪さと危険さを見たり感じさせたりすることでありました。そして、悪の根源についてすべてを知りながらも絶望のままに捨て置かれることより、それがどのようなものであって、永遠にそれから逃れるにはどうすればよいかをいま知ることの方がはるかに重要です。地獄と天国の正確な場所を知ること——もし可能だとし——よりも、地獄から逃れ、天国に行く方法を知ることの方が私たちの思想にとってどんなに価値のあることか分かっていたからです。彼をもっと高い見地に連れて行く努力はまだ無駄なことでした。というのは、彼はいつも自分の好む話題に戻ってしまいましたし、目に見えるような芳しい結果を得ることができないまま日は暮れていきました。私たちは、若者たちを教育する最善の方法について満足のいく対話もしました。彼はそのことについて、明らかに多くの考えを割きました。概して言えば、私の見解が真実で正しいということを彼に納得させられるところにたどりつけたと思います。他方、悪の問題について、彼が決して同意していないことを示す唯一の方法は、疑わしく首を振ることだけでした。彼にとって好機はまだきていないと、彼は予め決めていたように私には思えました。しかし、私たちはよき友人として別れました。彼はまだ真実というものを知性でしかとらえていませんでしたが、神がいつか彼にしみじみと真実をわからせるときがきてくれることを強く希望しました。

## ○二回目の面談

もうひとつの組の面談は五月十七日に設けられました。このときの訪問者は、日藩の家老たち、つまり執政者らの一人である「若狭」と、彼の弟「綾部」でした。若狭は背が高く、四十五歳ぐらいでしたが老けて見えました。彼の顔は、日陰に差す陽光のような最も愛嬌があって人好きのするものである一方で、非常に威厳のある振る舞いも見せました。彼に会った時、目からは愛情と喜びが放たれていました。彼は、心の中では長いこと私のことを知っており、会って語りあってみたいと長く欲していたと話し、さらに、神の摂理によっていま現にそうすることを許され、とてもうれしいと話しました。彼と弟の来訪はある意味、偶然のことでした。彼は思いもかけずに、藩主のもとを離れてこの町の近くに住む親戚を訪ねることができたのでした。

このとき、若狭と綾部のほか、二十歳と二十四歳の若狭の若い二人の息子たち、四年間使者役を務めた家来の本野を居間に通しました。この時の顔合わせは二日前とはどんなに違ったものだったでしょう。彼らは、使徒時代のベレアの町<sup>(11)</sup>の人たちのように、まったく快く福音を受け取り、無益な論争で自分自身や私を悩ませたりすることなく、主にキリスト教の特質や習慣に関するいくつかの点にさらに光明を得ようと実に自然で良識的な質問をいくつかしました。彼らは聖霊について学んでいました。

彼らは聖書に非常に精通しており、いくつか適切な引用もし、対話をしている間に私が何回か聖書の一節を口にすると、彼らは簡単にそれがどの一節かを理解し、それを決定的な証明として必ず受け入れました。彼らはイエスの言ったことすべてを信じ、彼が欲したことすべてを行う準備ができていました。

そのときまで彼らが実に勤勉に少なくとも四年にわたって聖書を学び続け、様々な宗教書も読み、好意的な気持ちでそのようにし始めていた

ことは記憶されなければなりません。この国の上流階級の多分ほとんどがそうであるように、彼らは庶民の宗教であった仏教をまったく信じていませんでしたが、一方で同時に、幸運にも無神論の極みに落ち込まずに済んでいました。彼らの心は移行を待つ状態にありました。その時、彼らはキリストの信仰を通じて救いを探し求め、見つけるところまで何とか導かれていました。

### ○彼らの経験

彼らの経験は徹底したものでした。彼らは自分の罪の重さを感じ、罪と罪の呪いから救世主が必要であることを悟りました。彼らは、それまで彼らが聞き知っていたほかのいかなる体系も無力であることを確信しました。そして彼らは、神だけが永遠の時間にふさわしいものとして喜んで受け入れました。

### ○受洗の求め

私たちは神の救済の力と愛について語り合いながらすてきな午後を過ごしていました。私の友人たちが帰ろうとしていると思ったまさにそのとき、若狭は私の不意を突いて、町から立ち去る前に彼と弟の綾部に洗礼を授けることを私が拒むかどうか聞いてきました。私は驚きました。なぜなら、たくさんの日本人がいろいろな時に、キリスト教徒になることが本当に言葉の通り非常に危険であると話していたからです。私は彼らから次のようなことを聞くのではないかと思っていました。「私たちは信仰しています、洗礼も受けたいです。でも、敢えて信仰を変える者すべての頭上に国法によって白刃を掲げられることが避けられない限り、その一点の故に、私たちは自分の望みがかなえられるとは思えません。現在のところ私たちはこのままでいるしかありません。しかし、このひどい布告が廃止されれば、私達は洗礼を得られるでしょう」と。

あの日の午後、私たちは洗礼について話していたのに、彼らに洗礼を急がせなかった、という点において、とても軽率でした。私は急がせようと思えばできたのに。そのため、私は、彼の燃えるような望みの一部のために祈っていただけの者が、突然その全部を受け止めなければならなくなったことを感じました。

私は訪問者たちにその行為を軽く考えず、その効能に関して迷信深い考えを抱かないよう警告しました。私は聖礼典の宗教的な重要性と、それを執行された者に帰される義務の大きさを強調しました。彼らが、私たちの作法では、心の底から肯定しなければならないであろう質問を、彼らに何度も繰り返しました。そしてついには、心を探る神<sup>(12)</sup>の前にいるつもりで決心をなさいと彼らに話しました。

彼らは注意深く聞いていましたが、洗礼を受けたいと繰り返し、秘密のうちに行われることだけを求めました。このことに関しては彼らには懸念がありました。日本に情報が戻ってきて、彼らや家族の命を危険にさらすことがないように、アメリカにも報告しないことを求めさせました。私はこれに同意し、神聖な儀式の日取りを決めました。

### ○五旬節の日（聖霊降臨日）

次の主の日、すなわち五旬節（ペンテコステ）の日を選び、若狭は午後七時に決めました。彼はいつも半ダースものお供を連れて動き回るような地位におり、ひと目につかないようにしないと私のもとを訪れることができませんでした。日曜日の約束の夜まで彼には再び会いませんでした。しかし、綾部はその日までに私のもとを二度訪れたので、彼と彼の兄にとって役に立つであろうと思われたことを教えました。

### ○洗礼式

ついに安息日の夜がやってきて、二人の受洗予定者は姿を見せ、本野

のほかに誰もいない部屋に入りました。八人の従者らはドアのところで帰され、一時間後に再び来るよう命じられました。私は不必要な拘束を受けることなどないように、すべてを前もって準備しました。雨戸を閉め、ランプを灯し、中央のテーブルに白い布を広げ、もっといいものが欲しかったのですが、大きなカットグラスの果物皿を洗礼盤代わりに用意しました。本野の傍らに私の妻がたった一人の立会人として出席したので、部屋にいたのは五人だけでした。私はマタイによる福音書二十八章の朗読で始めて、結びの数節をゆったり長々と述べ、伝道団体の目的について話し、ここにともにいる私たちにイエスの言葉が繋がったのだということについて言及しました。私は彼らに、彼らの特別困難な状況に負けたりせず、信仰と愛と神聖さで逆に隣人からの非難や迫害そのものまでも打ち負かすよう熱心に説きました。そして私たちは英語と日本語両方でともに祈り、洗礼式用に間に合わせて形式を変えた礼拝式を続けて行い、聖礼典を執行した後に祈禱と感謝の祈りで締めくくりました。本当に神聖な時間でした。神が弱く大したことのないしもべである私に、親愛なる彼ら信者仲間を救い主キリストへと導くことを許して下さい、彼らを神の教会へ加えて下さったことに、私はとても名誉を感じました。幸せの集まりを終えた後、若狭は朗らかな穏やかさで「今、私は長い間、心から求めていたものを手に入れた」と話しました。

### ○陰徳を施す

そして彼は、十二年もの昔、恐らくは一八五四年ごろ、最も早い時期に日本にやって来た米国が英国の船から落ちたのであろう英語で書かれた一冊の小さな本が、長崎湾に浮かんでいるのを何人かの地元の者が見つけたことを私たちに語りました。この本は彼の手にするところとなり、彼は何が書かれているのか知りたかったが、彼がそれについて知ることができたのは、それまで日本に持ち込まれたどんな本とも異なり、神と



イエス・キリストについて書かれているということだけでした。実はそれは新約聖書でした。彼は、五、六年前にその漢訳本を見つけることができるまで心が落ち着きませんでした。

彼はコツコツと福音を読み進め、綾部、本野、そして最初に私のところに来た高貴な人物を含む四人に同じことをするよう勧めました。そして続いて綾部と本野がここを訪れ、彼らの出席を得て教えを施し、そして終着点に至りました。

それは一八六六年五月二十日のことでした。

## 注

- (1) 日本における初めてのプロテスタント受洗者は、実際には村田・綾部兄弟ではなく、1865年に神奈川でジェイムズ・ハミルトン・バラから洗礼を受けた矢野隆山である。
- (2) 「長崎」の誤記だと思われる。フルベッキが書き誤るとは思えないので、出版の際に間違えたものか。
- (3) 「H 藩の城下町 S」とは「肥前藩の城下町・佐賀」のことであろう。
- (4) 1862年の生麦事件によって日英関係が険悪化して開戦の可能性さえ言われ、各地で攘夷派浪士らの動きが活発化し、長崎にいる外国人の身に危険が及びかねない状況のこと。
- (5) 原文では”the Presbyterian Mission Press at Shanghai”。1844年、マカオに開設されたアメリカ長老会の印刷所が翌年に寧波に移転し、60年に上海に移り「美華書館」と称した(宮坂弥代生「東洋におけるプロテスタント伝道と印刷: 美華書館(アメリカ長老会印刷所)を中心に」『中国 21』28(2007年)180頁)。
- (6) 新約聖書・ヘブライ人への手紙 4:16。『聖書: 新共同訳(旧約聖書続編つき)』(日本聖書協会、2000年)によった(以下同じ)。
- (7) 本野盛亨(周蔵)、1836-1909。村田政矩の家臣で、村田の援助で緒方洪庵の適塾などで学ぶ。明治政府では横浜税関長などを務めた。読売新聞創設者の一

人で後に社長。

- (8) 旧約聖書・サムエル記上 14:6。
- (9) 当時、フルベッキは長崎の大徳寺内に住んでいた。
- (10) 新約聖書・使徒言行録 24:25。
- (11) 新約聖書・使徒言行録 17:10。
- (12) 旧約聖書・エレミア書 17:10。